

試料から大量の遺伝子リードを獲得し全体を比較解析し、糖尿病マーカーと成りうる腸内細菌グループを特定した、という内容に非常に興味を持ちました。

FEMS会議の意義

2日目の午後に、EUの首席科学顧問 Anne Glover 氏の講演があり、科学者が政治家に正しい知識と助言を与える重要性を訴えていました。Glover氏は、朝日新聞のインタビュー記事「科学者は信頼できるか」において、(震災後に信用を失った)科学者が信頼を取り戻す方法として「間違いを認めること、正直であること、透明性をもつこと」が重要である、と語っていたことが印象に残っており、今回の学会で直接講演が聞けたことは大変有意義でありました。過去5年間のFEMS会議では、温室効果ガスの発生削

減に寄与する農業政策の提案が研究者から政策関係者に直接出され、それに従った条例制定や政策が行われたそうです。今回の会議では、研究情報の保護や再生可能エネルギーの利用、ドイツやイギリスでアウトブレイクがあった薬剤耐性菌の蔓延を防ぐ方法に関して、政治関係者と科学者が具体的な議論を交わすセッションもありました。本会議は、研究者間の情報交換だけが目的ではなく、欧州の科学技術や医療の政策に、科学者が影響を与える重要な機会であることを認識しました。

最後に、今回の会議へ出席する貴重な機会と経験を与えて下さいました公益財団法人農芸化学研究奨励会関係者の方々に、深く御礼を申し上げます。

3rd EPNOE International Polysaccharide Conference に参加して

京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 田中知成

フランス・ニースの Acropolis Convention and Exhibition Center において2013年10月21日から24日まで開催された3rd EPNOE International Polysaccharide Conferenceに参加した。EPNOEとはEuropean Polysaccharide Network of Excellenceの略称であり、ヨーロッパ圏の16拠点多糖類に関する研究および教育について連携することを目的に発足した。これにアメリカ化学会のCellulose and Renewable Materials Divisionが加わり、本国際会議が運営されている。

今回の開催地ニースは南フランスの東部、“コート・ダジュール”地方の中心地である。“コート・ダジュール”

とは“紺碧海岸”の意味であり、フランス屈指のリゾート地として知られている。しかし今回は10月下旬の開催ということで、夏のバカンスシーズンの賑わいは残念ながら感じることができなかった。開催前には学会から、期間中の予想気温(最高21℃、最低17℃、なぜか海水温19℃との情報も含まれていた。)と共に、The “bad” news is that it may rain. と書かれたメールが送られてきたものの、行ってみると晴れの日も多かったのは幸運であった。私がニース・コート・ダジュール空港に着いたのは、予定から半日以上遅れた会議初日の昼となってしまった。関西空港を離陸して経由地であるオランダのアムステルダムへ向かう飛行機が途中でエンジントラブル(オイル漏れ?)のためにスウェーデンのストックホルムに緊急着陸したためである。

4日間に亘る会議では多糖に関する様々な分野の発表が行われた。Hans-Peter Fink教授とThomas Heinze教授が



写真1 学会会場

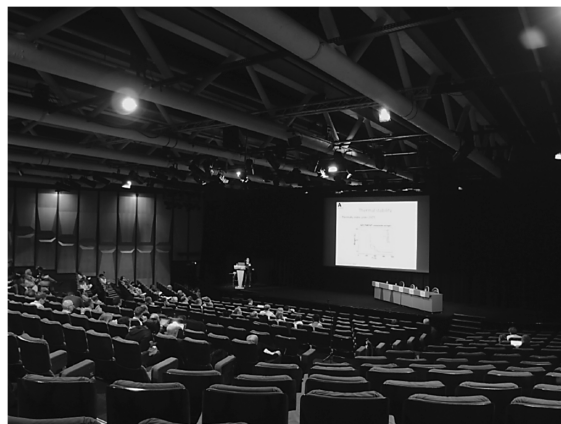


写真2 口頭発表会場



写真3 ポスター発表会場



写真4 ニースの海岸

スペシャルゲストとして招かれ、セルロースやその誘導体に関する講演が行われた。その他にも、4件のプレナリー講演、14件の基調講演、8件の招待講演をはじめ、236件の口頭発表、201件のポスター発表が行われ、約450人が参加した。発表内容は、合成、構造、分析、ナノテクノロジー、バイオプラスチック、バイオメディカル、バイオ燃料、紙・パルプ、食糧など多岐に亘っており、多糖類の幅広さを再認識する良い機会となった。特にセルロースに関する発表は非常に多く、セルロースを使ったマテリアル開発への期待が大きく感じられた。近年ではセルロースやデンプンなどの多糖類は、持続可能な再生資源“バイオベースマテリアル”として注目されており、多糖類に対す

る注目の高さを実感した。

筆者自身は、「Chemo-enzymatic Synthesis of a Novel Inclusion Supramolecular Polymer Composed of Amylose and Poly(L-lactide)」のタイトルで、アミロースとバイオベースポリマーであるポリ乳酸を化学-酵素的手法によって融合した新奇な超分子ポリマーの合成について発表した。本会議ではマイナーな内容かと思われたが、今後の研究展開において有意義なディスカッションをすることができた。

最後に、本国際会議参加にあたり渡航費を援助いただきました公益財団法人農芸化学研究奨励会に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

17th International Congress of Comparative Endocrinology (第17回国際比較内分泌学会)に参加して

国立循環器病研究センター 永井千晶

私は、スペインのバルセロナ市内にあるバルセロナ大学生物学部において、2013年7月15日から19日にかけて開催された17th International Congress of Comparative Endocrinology (第17回国際比較内分泌学会)に参加した。IFCES (International Federation of Comparative Endocrinological Societies) が主催する本学会は、様々な動物種における内分泌機構の多様性と普遍性の理解をテーマとし、4年に1度、世界各国の内分泌学研究者が一堂に会する、歴史のある学会である。本学会では、6演題の基調講演のほか、State-of-the-Art および Oral communication を含む18のシンポジウム、48演題の口頭発表、175演題のポスター発表、および7つのワークショップが行われた。ヨーロッパでの開催ということでEU圏各国からの参加者

が多かったが、国別でみるとスペインの次に日本からの参加者が多く、本分野における日本人研究者の貢献度の大きさを感じた。

今年ポスドク2年目にあたり、本学会では、博士課程在籍時の仕事について「Competitive binding of ion transport peptide-like (ITPL) and tachykinins to *Bombyx* neuropeptide G protein-coupled receptor (BNGR)-A24」という演題でポスター発表を行った。また、現職の仕事について「Dynamic changes in beta-2-microglobulin and natriuretic peptide family peptides during the progression of heart failure in Dahl salt-sensitive rats」という演題で口頭発表を行った。ポスター発表では、カイコの甲殻類血糖上昇ホルモン (CHH) 族ペプチドであるITPおよびITPLの受容体として我々が同定したオーファンGタンパク質共役型受容体のうち、BNGR-A24について、タキキニン関連ペプチドに対する受容体としての機能解析の結果を報告した。ポスターの公開期間は会期中2日間のみであったが、配布用のポスター縮小版が早々になくなったことと、